



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Vulnerability as the Beginning of Care in Modernist Literature : F.Scott Fitzgerald, Raymond Chandler, Henry Miller, and J. D. Salinger [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	井出, 達郎
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7225号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94855
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Tatsuro_Ide_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：井出 達郎

学位論文題名

Vulnerability as the Beginning of Care in Modernist Literature:

F. Scott Fitzgerald, Raymond Chandler, Henry Miller, and J. D. Salinger

（モダニズム期のアメリカ文学におけるケアのはじまりとしての傷つきやすさ

—— F. スコット・フィッツジェラルド、レイモンド・チャンドラー、
ヘンリー・ミラー、J. D. サリンジャー）

・本論文の観点と方法

本論文は、個人の自律性に重きを置く価値観が国家および個人レベルで大きく揺らいだと考えられる広義のモダニズム期のアメリカ文学に注目し、F. スコット・フィッツジェラルド、レイモンド・チャンドラー、ヘンリー・ミラー、J. D. サリンジャーらのアメリカ文学を代表する作家たちの作品群において、それまでは克服すべきものとされてきた「傷つきやすさ (vulnerability)」というモチーフに注目し、それらが他者への「ケア」という積極的な意味を持つ物語であることを考察・検証するものである。

方法としては、「傷つきやすさ」および「ケア」という主軸となる二つの鍵概念に関する先行研究を基礎とし、さらに 21 世紀初頭から本格化する「ニュー・モダニスト・スタディーズ」と呼ばれる動向に本研究を接続するという方針が採られる。それにより、従来、二つの鍵概念から連想される少数派および家庭のケア労働などの文脈を、男性を主人公とする 4 人の男性作家の作品に押し広げることが可能となった。4 名の作家たちがそれぞれ直接あるいは間接的に関係していた同時代の思想や歴史的な文脈の把握、および丹念なテキスト読解をとおして、表向きには自律的な個人である主人公を描いていると思われる作品群に対しても「傷つきやすさ」および「ケア」という観点の有効であることを明らかにし、各作家の特質を新たに解明・評価することを試みている。

・本論文の内容

本論文は、その序論において、4 人の作家を研究対象とする理由が簡潔に述べられた後、各作家の考察にそれぞれ 2 章ずつが充てられ、全体で 8 章から構成されている。まずフィッツジェラルドの作品が医療人文学の一種でもあることを論じ、ついでチャンドラーの探偵小説を人間の交流を超えた「世界」に対する「ケア」という観点から読み直し、さらに、ミラーの自伝的作品を自己に対する「ケア」として再解釈し、最後にサリンジャー作品が、死者

に対するケアでもあることを論じることで、全体として、「傷つきやすさ」というモチーフが、他者との間に「ケア」という関係を開く積極的な契機になっていることを解明していく。

第1章は、フィッツジェラルドの小説『グレート・ギャツビー』から、作中で使用されている「傷つきやすさ (vulnerability)」と「ケア (care)」という表現を抽出し、「ケアの始まりとしての傷つきやすさ」という本論文の骨格となる主題を提示する。従来の研究では、主人公を「自分で自分を作る男」、すなわちアメリカにおける「セルフメイド・マン」と捉えているが、最終的には主人公の夢が失敗に終わることから、その結末は、自律した自己という考えを問い直しているものと見なしうる。語り手および主人公の「傷つきやすさ」に注目することで、自己と他者の関係が、「ケア」によって結び結ばれるものであることを明らかにする。

第2章は、ケアという主題が代表作の『グレート・ギャツビー』にとどまるものではなく、フィッツジェラルドにとっての主要な関心であったことを論じる。二つの短編作品、「アルコール依存症の患者」と「家族は風のなか」という作品は、作家の医療人文学に対する関心を露わにしている。それらの作品では、「傷つきやすさ」から始まる「ケア」というあり方が、一般化された「症例 (case)」ではなく、個々の個別具体性に対してその場その場での「応答 (responsibility)」、特に、従来の「責任」の概念からは区別されるような明確な原因なしでの「応答」であることを浮き彫りにする。それは、『グレート・ギャツビー』の中で使われていた「責任がある (responsible)」という表現と共鳴しながら、フィッツジェラルド作品が提示するケアが「単独性への応答」という内実を伴うものであることを示している。

第3章は、フィッツジェラルドが提示する傷つきやすさとケアの主題がモダニズム文学という大きな文脈とつながりうることを示すために、レイモンド・チャンドラーの長編第一作『大いなる眠り』を取り上げる。チャンドラーは、『グレート・ギャツビー』において描かれていた「内と外 (within and without)」に在るという感覚と響き合いながら、私立探偵小説というジャンルにおいて、「世界」に対する特徴的な「関心 (care)」を持っていた。『大いなる眠り』における「世界」に対する特別な関心のあり方は、安楽椅子探偵と対比されるハードボイルド小説の私立探偵の特徴、すなわち、世界を外から「像 (picture)」として見るのではなく、その「内」を生きざるをえないこと、つまりは「世界の中に在ること」という様態として現れる。それは私立探偵を「傷つきやすい」存在にし、他者の関わり合いへと引き込む。そこには、探偵が依頼者や被害者、あるいは犯人という「傷つきやすい者たち」との「ケア」の関係に導かれていくという構図がある。

第4章は、後年の長編『ロング・グッドバイ』において、「世界の中に在ること」が「時間の流れの中に在ること」という事実となり、傷つきやすさとケアという主題が流れる時間の中で主題化されていることを論じる。同作の私立探偵は、初期の作品よりも年を取ったという単純な事実とともに、ジャンナ・トンプソンが言う「時間的な傷つきやすさ (temporal vulnerability)」をその根本的な特徴としている。それは、「タフ」であり、「自分自身のボ

ス」でなければならないはずのハードボイルド私立探偵が、「世界」の中においては死に向かう存在であるという事実を突き付け、彼が抑圧していたケアの場としての「家」の問題と向き合わせることになるのである。

第5章は、ヘンリー・ミラーの作品において、自律した自己を立ち上げようとする瞬間に傷つきやすさが露呈することが、死ではなく「生」の問いとして提示されていることを論じる。実質的な長編第一作である『北回帰線』は、ミラーが自ら自伝的小説と呼んでいる形式を採用しながら、古典的な自伝作品としてのベンジャミン・フランクリンの『自伝』とは対照的に、「父」を中心とした生の「再生産」からの逸脱を描いている。作家にとっての生とは、リー・エーデルマンの言う「生殖的未来主義」、すなわち、生の再生産のみに価値を置いた生のあり方に抵抗するものであり、ケア・コレクティブのいう「乱交的なケア (promiscuous care)」の実践であることが示される。

第6章は、ミラーの後期の自伝的小説『セクサス』が、作家になる以前のパリ滞在時の人生をさかのぼり、かつての「書くことのできない作家」としての自己を強調しながら、「能力」の欠如が否定的な意味での傷つきやすさとみなされる生のあり方を根源的に問い直していることを明らかにする。従来批判の対象であったミラー作品のどこまでも受動的な態度を、吉本隆明のミラー論における「なにもできないじぶん」という視点を出発点にすることで、それが本作品に実際に繰り返し登場する「情熱」という逆説的な力になっている可能性が浮かび上がる。「情熱」は、自己を他に開いていく文字通りの「力」として、「他者と共に苦しむこと (co-passion)」というケアのあり方をもたらすのである。

第7章は、サリンジャーの短編「エズメに、愛と悲慘をこめて」が、「そこにはない」存在に対するケアを主題にしていることを論じる。先行研究が論じてきた本作の帰還兵における PTSD (Post Traumatic Stress Disorder) とは、結局、「現在 (present)」という時間を超えた存在と自己との関係から生じている症状、あるいは傷つきやすさである、と見なすことが出来る。本論全体の骨格をなす傷つきやすさの逆説に沿えば、そこにはない存在との関係が、本作品のタイトルに含まれている「愛」の要素なのであり、そこが強いケアという関係の始まりになるのである。

第8章は、前章で確認したサリンジャーの「そこにはない」存在とのケアという主題を、長編『キャッチャー・イン・ザ・ライ』における死者という観点から論じ、死んだ弟と主人公の関係が、聖書における死者の復活のパロディとなっている構図を明らかにしつつ、生者と死者とがケアのあり方を体現していることを明らかにする。主人公は、死者を復活させるキリストをパロディ化しつつも、結局は弟を復活させられない無力さを露呈する。しかし主人公が曝け出す死者に対する無力感は、かえってその死者の存在を強烈に喚起することになる。そのとき、死者にケアされる生者という特異な反転が起きるのである。

結論部では、研究対象の範囲として設定したモダニズム期という具体的な時代を超えて、2020 年以降のコロナ禍によって明らかになった人間の根源的な傷つきやすさとそこから必然的に要請されるケアの必要性を経由することで、本論文がモダニスト作家という特定の

集団だけでなく、他の多くの個人の存在のあり方を問うものになることが述べられる。